

愛犬の
赤赤と
赤紙の
垢じみし
アカシヤの
赤煉瓦
秋来れば
秋立つは
秋近し!
秋の雨に
秋の風
秋の声
秋の空
秋の辻

三三
四四
五五
六六
七七
八八
九九
一〇〇
一一一
一二二
一三三
一四四
一五五
一六六
一七七
一八八
一九九
二〇〇

秋の夜の
空家(あきや)に入り
呆(あき)れたる
呟呻(あくび)噛み
朝朝の
あき風が
浅草の
夜のにきはひに
凌雲閣の
朝な朝な
支那の俗歌を
撫でてかなしむ、
朝寝して
朝の湯の
朝はやく
朝まだき

二一八
二一九
二二〇
二二一
二二二
二二三
二二四
二二五
二二六
二二七
二二八
二二九
二三〇
二三一
二三二
二三三
二三四
二三五
二三六
二三七
二三八
二三九
三〇〇

遊びに出て
あたらしき
木のかをりなど
心もとめて
サラドの色の
背広など着て
洋書の紙の
新しき
明日の来るを
インクのにほひ栓抜
けば
インクの匂ひ、目に
沁むも
からだを欲しと
サラドの皿の
本を買ひ来て

三三六
三三七
三三八
三三九
三四〇
三四一
三四二
三四三
三四四
三四五
三四六
三四七
三四八
三四九
三五十
三五一
三五二
三五三
三五四
三五五
三五六
三五七
三五八
三五九
三六〇

あてもなき
あの頃は
あの年の
あはれかの
国のはてにて
眉の秀でし
眼鏡の縁を
我の教へし
男のごとき
あはれなる
あはれ我が
あまりある
飴売の
あめつちに
雨つよく
雨に濡れし

三六一
三六二
三六三
三六四
三六五
三六六
三六七
三六八
三六九
三七〇
三七一
三七二
三七三
三七四
三七五
三七六
三七七
三七八
三七九
三八〇
三八一
三八二
三八三
三八四
三八五
三八六
三八七
三八八
三八九
三九〇

初句索引

(各歌を五十音順(本文のかなづかい)に配列した。)
数字は本文の歌番号を示す。

雨降れば 四九
 あやまちて 三〇
 あらそひて 三三
 曠野(あら)の(ゆく) 五五
 曠野より 五五
 ある朝の 二〇
 或る時の 二七
 ある年の 三〇
 ある日のこと 二九
 ある日、ふと、 三三
 或る市に 三三
 あをじろき 三〇
 青空(あをぞら)に 一四
 青に透く 三三
 青塗の 五七

い

いかにせしと 三七
 怒る時 三六
 呼吸(いき)すれば、 五三
 いくたびか 三三
 いささかの 三四
 石川は 三六
 石狩の 三六

空知郡の 六〇
 美国といへる 三〇
 都の外の 四三
 石ひとつ 一七
 医者(い)の顔色を 六七
 石をもて 二四
 椅子をもて 三六
 いそがしき 四〇
 いたく汽車に 三六
 いたく錆びし 四
 痛む歯を 五〇
 一度でも 九
 意地悪の 三三
 いつかは非、 六五
 何処(いづく)やらむ 一六
 いつしかに 六五
 正月も過ぎて、 六五
 情をいつはる 四六
 泣くといふこと 二八
 夏となれりけり。 七三
 一隊の 二四
 いととなく 六六
 記憶に残りぬ― 六六
 我にあゆみ寄り、 六六

いつなりけむ 四二
 何時(いつ)なりしか 四三
 いつの年も、 五二
 いつまでか、 五五
 いつまでも 六一
 いつ見ても 五三
 いつも逢ふ 三
 いつも来る 五〇
 いつも子を 七〇
 いつも睨む 二五
 糸きれし 一九
 いと暗き 一九
 蟬(いと)鳴く 二八
 いのちなき 八
 岩手山 二九
 家にかへる 六〇
 家を出て 五九
 今は亡き 一九
 今までの 六一
 いま、夢に 六三
 いらだてる 四〇
 いろいろの 六〇

う

雨後の月 三六
 うす紅く 三六
 うすのろの 三三
 うすみどり 二四
 薄れゆく 四七
 うたふごと 三九
 打明けて 九
 うつとりと 六
 なりて、剣をさげ、 六
 本の挿絵に 四
 腕拱みて 四
 うぬ惚るる 四
 生れたと 一七
 うらがなしき 三
 裏山の 三
 売り売りに 三
 売ることを 三
 うるみたる 三
 愁ひある 三
 愁ひ来て 三
 運命の 三

君に似し

四六

京橋(きやうばし)の

四六

興来れば

一六九

共同の

三九九

気弱なる

五三

霧ふかき

二四四

銀行の

三三七

く

草に臥て

二七

葉のむ

六四

ことを忘るるを、

六四

ことを忘れて、

七二

くだらない

一四四

郷里(ぐに)にあて

四〇

邦人(ぐにびと)の

一五

クリストを

四三

回診(くわいしん)の

六七〇

外套(ぐわいたう)の

六二

軍人に

六三

け

芸事も

三四

教室(けうしつ)の

一六

今日(けふ)逢ひし

四四

今日聞けば

三三

今日はなぜか、

六四

今日ひよいと

五三

今日ひよつと

七六

今日もまた

七六

酒のめるかな!

五八

胸に痛みあり。

七二

今日よりは

五九

けものめく

三

原稿紙に

六三

こ

公園の

五八

かなしみよ君の

五八

木の間に小鳥

四四

隅のベンチに

五七

とある木蔭の

五九

ごおと鳴る

三三

ころろざし

三九

ころろみに

二九

ころろよき

六

春のねむりを

四一

人を讃めてみた

四

我にはたらく

三〇

心より

八八

五歳になる

三六

不來方(こずかた)の

一五

こそこそ

八

こつこつと

一〇九

ことさらに

九

事もなく

一〇五

コニヤツクの

四六一

このごろは

三〇八

この四五年、

三〇

この次の

一六

この日頃

五

小春日の

四七

こほりたる

三六

こみ合へる

二

古文書の

四三

小奴(こやつこ)と

三九

子を負ひて

三六

子を叱る、

六八

児を叱れば、

七九

今夜こそ

三三

さ

さいはての

三三

先んじて

一八

酒のめば

三三

鬼のごとくに

三三

刀をぬきて

三三

悲しみ一時に

三六

札幌に

三三

「さばかりの

三

さびしきは

四三

三味線の

四八

さらさらと

二六

雨落ち来り

二六

氷の屑が

四〇

さりげなき

三三

さりげなく

四七

し

自(し)が才に

一八

叱られて

一五

時雨(しぐれ)降る

二九

しつとりと

五七

酒のかをりに

五七

なみだを吸へる 九
 水を吸ひたる 七
 実務には 六
 死にし児の 四〇
 死にしとか 四〇
 死にたくて 一三
 死にたくは 三三
 死ぬことを 五九
 死ぬばかり 三六
 死ぬまでに 四三
 死ぬ死ねと 七
 十月(じふぐわつ)の 五元
 朝の空気に 五〇
 産病院の 六七
 自分よりも 三〇
 潮(しほ)かをる 三〇
 しみじみと 四一
 しめらへる 四三
 師も友も 一七
 正月の 五三
 しらしらと 三六
 しらなみの 三六
 知らぬ家 五
 城址(しろあと)の 一六

白き皿 四三
 白き蓮 一〇
 真剣に 六
 尋常の 八
 しんとして 三九
 す 三九
 すがた見の 四七
 過ぎゆける 五九
 すこやかに、 七五
 すずしげに 四七
 すつきりと 五〇
 すつぱりと 六〇
 ストライキ 一七
 砂山の 一七
 裾によこたはる 七
 砂に腹這ひ 六
 吸ふごとに 四六
 するどくも 四七
 摩(す)れあへる 三三
 水晶の 一〇
 水蒸気 三七

せ 三六
 小学(せうがく)の 三六
 小心の 三六
 寂寞を 三七
 そ 三七
 宗次郎に 三七
 そうれみろ、 三七
 底知れぬ 五九
 そことなく 四八
 その親にも、 五八
 そのかみの 五八
 愛読の書よ 一七
 学校一の 一八
 神童の名の 三三
 その頃は 三三
 その名さへ 三三
 その後(のち)に 一六
 その膝に 四三
 そのむかし 四三
 秀才の名の 一三
 その昔 一三
 小学校の 三三

揺籃に寝て 三〇
 蘇峯の書を 一〇
 空色の 四六
 空知川 三六
 空寝入 六
 それとなく 六
 郷里のことなど 三九
 その由るところ 三九
 それもよし 四〇
 そを読めば 三六
 そんならば 四一
 た 三
 大海に 五〇
 大海の 五〇
 大といふ 一〇
 ダイナモの 三
 大木の 三
 高きより 三
 高山の 三
 出しぬけの 三六
 誰(た)そ我に 一〇
 ただひとり 六
 ただ一人の 三

たのみつる 三〇五
 たはむれに 二四一
 旅七日 四四四
 旅の子の 三〇三
 たひらなる 四九三
 旅を思ふ 五八八
 たへがたき 六〇六
 田も畑も 三二二
 誰が見ても 二〇〇
 とりどころなき 二〇〇
 われをなつかしく 二二三
 誰か我を 三三七
 たんたらたら 二一八

ち

近眼(ちかめ)にて 一四四
 力なく 二六三
 父のごと 二九〇
 ちつとして 二二三
 黒はた赤の 三三三
 寝ていらつしやいと 六六六
 ちつとして、 六〇一
 蜜柑のつゆに 六〇一
 茶まで断ちて、 三三三

千代治等も 二一九
 ちよんちよんと 三六六
 ちりちりと、 五五六
 智慧とその 三三六
 つ 三三六
 つかれたる 八八
 月に三十円も 七〇〇
 つくづくと 四四四
 伴(つれ)なりし 三三三
 て 三三三
 手が白く 四七
 敵として 三三三
 手にためし 四四四
 手套(てぶくろ)を 四四四
 手も足も 四四四
 はなればなれに 五五五
 室いつばいに 四四四
 手を打ちて 六六六
 と 六六六
 ドア推して 六六六
 とある日に 二二二

東海の 一
 どうかかうか、 六三三
 どうなりと 三三三
 とかくして 八八
 時ありて 八八
 子供のやうに 八八
 猫のまねなど 三三三
 時として 三三三
 君を思へば 三三三
 時として、 三三三
 あらん限りの 三三三
 解けがたき 三三三
 どこやらに 三三三
 杭打つ音し 四四四
 何処(どこ)やらに 四四四
 沢山の人が 三三三
 若き女の 四四四
 年明けて 五五五
 年ごとに 三三三
 途中にて 三三三
 乗換の電車 五五五
 ふと気が変り、 五五五
 十年(ととせ)まへに 四四四
 戸の面(も)には 五五五

な

遠くより 八八
 笛ながながと 六三三
 笛の音きこゆ 三三三
 友がみな 三三三
 友として 三三三
 友はみな 一六六
 友も妻も 六六六
 友よきは 九九
 友われに 三三三
 取りいでし 三三三
 とるに足らぬ 三三三
 どんよりと 九九
 な 九九
 長き文 四四四
 長く長く 二二二
 長月も 二二二
 汝(な)が瘦せし 三三三
 泣くがごと 三三三
 亡くなれる 三三三
 殴らむと 三三三
 何故(なぜ)かうかと 六六六
 夷(なだら)かに 六六六
 なつかしき 六六六

晴れし空
晴れし日の

一六一

かなしみの一つ！

一六四

公園に来て

一六五

ひ

ひさしぶりに

公園に来て

一六五

ひさしぶりに、

ふと声を出して

一六五

引越しの

びつしよりと

ひでり雨

人ありて

人がいふ

人がみな

ひと塊の

人氣なき

人ごみの

ひとしきり

人といふ

ひととこころ、

人とともに

人並の

ひとならび

ひとと晩に

人ひとり

人みなが

ひと夜さに

皮膚がみな

非凡なる

病室の

氷養の

下よりまなこ

とけて温めば、

病院に

入りて初めての

来て、妻や子を

病院の

窓によりつつ、

窓のゆふべの

百姓の

ひやひやと

ひややかに

清き大理石に

蠟のならべる

平手もて

ひる寝せし

四八八

六八九

二八四

一三三

五

五三

四

六四四

六六七

六八一

六八

六五八

六四

六六

六八

六四

四七一

六三

四八

四八

四八

四九

三五

七三

火をしたふ

四〇〇

ふ

ふがひなき

ふくれたる

二晩(ふたばん)おきに、

二三こゑ

藤沢と

二日前に

ふと思ふ

ふと深き

ふと見れば

船に酔ひて

ふるさとに

ふるさとの

かの路傍の

空遠みかも

村医の妻の

父の咳する

土をわが踏めば

停車場路の

寺の畔の

寺の御廊に

一四三

六五〇

五六

五四

六四

三〇六

三〇一

三三

四九

三〇九

三四七

二〇四

二五

二六

二六

二六

二六

二五

二六

二六

訛なつかし

麦のかをりを

山に向ひて

ふるさとを

出で来し子等の

出でて五年、

古新聞！

古手紙よ！

解剖(ふわけ)せし

へ

剽軽(へうきん)の

飄然(へうぜん)と

漂泊(へうはく)の

へつらひを

ほ

燈影(ほかげ)なき

ほそほと

ほたる狩

ほとばしる

頬(ほ)につたふ

ほのかなる

頬の寒き

一六八

三二六

三三

二二

六三

六四

六四

一尺

一尺

一尺

一五

三〇

三

三

三

三

三

三

三

三

二

二六

四六

ボロオヂンと 六九五
 ばんやりと 六三三
 本を買ひたし、 五七五
 ま 三三三
 巻煙草 三三三
 まくら辺に 七〇六
 枕辺の 七〇八
 負けたるも 三三六
 真白なる 三三六
 大根の根の 三三六
 ラムプの笠に 三三八
 ラムプの笠の 三三三
 マチ擦れば 三三三
 松の風 二九三
 待てど待てど、 六三三
 窓硝子 四九九
 舞へといへば 三三五
 真夜中に 六四二
 真夜中の 六四二
 俱知安駅に 三三三
 出窓に出でて、 三七一
 まれにある 三三

み

みすばらしき 三三三
 みぞれ降る 三三三
 三度(みたび)ほど 三三三
 路傍(みちばた)に 六〇
 路傍の 六〇
 水漬(みづたまり) 三三〇
 水のごと 三三〇
 見てをれば 三三〇
 港町 四六六
 見もしらぬ 四六六
 脉(みやく)をとる 二四六
 看護婦の手の、 六三七
 脈をとる 六三七
 手のふるひこそ 六六六
 風流男(みやびを)は 三三三
 見よげなる 二九二
 む 三三三
 六年(むとせ)ほど 四三〇
 胸いたむ 六六六
 胸いたむ 六六六
 むやむやと 三三三

むらさきの

め

目さまして 三三三
 直ぐの心よ！ 三三三
 猶起き出でぬ 三三三
 ややありて耳に 四六一
 目さませば、 六六一
 珍らしく、 六六八
 眼閉づれど 三三三
 目になれし 二六六
 目の前の 三三三
 目をとちて 三三三
 口笛かすかに 四三三
 目を閉ぢて 三三三
 傷心の句を 三三〇
 眼を病みて 二六六
 目を病める 四三三
 む 三三三
 もう嘘を 六六六
 もうお前の 六六六
 若(も)しあらば 三三三
 ものなべて 三三三

物怨ずる

百年(ももとせ)の

森の奥

森の奥より

盛岡の

や

やとはかり 二五一
 やはらかに 二五一
 積れる雪に 二五一
 柳あをめる 二五一
 山の子の 二五一
 やまひある 二〇〇
 やまひ癒えず、 三三七
 病のごと 二五二
 やみがたき 六三三
 病みてあれば 六三三
 病みて四月—— 六三三
 そのときどきに 三三三
 その間にも、猶、 三三三
 病むと聞き 三三三
 やや遠き 六六六
 やや長き 四三〇

ゆ

雪のなか 三〇〇
 夢さめて 一五二
 ゆるぎ出づる 三三三
 ゆゑもなく 四九二
 海が見たくて 三〇八
 憎みし友と 三〇八
 よ
 夜明けまで 一三三
 用もなき 四七三
 よく怒る 四九〇
 よく叱る 一三三
 よく笑ふ 七五
 よこれたる 四三二
 足袋穿く時の 五五五
 手を洗ひし時の 三六四
 手を見る——ちやうど 四九四
 煉瓦の壁に 五九三
 世におこなひ 四九二
 世の中の 五二六
 夜(よ)の二時の 三二六

世のはじめ 二九六
 よりそひて 三九三
 夜おそく 四四四
 つとめ先より 四三三
 停車場に入り 四六六
 何処やらの室の 五五五
 戸を練りをれば 一六二
 夜寝ても 三三三
 世わたりの 四四四
 ら
 浪淘沙(らうたうさ) 四四四
 「労働者」(らうどうしや) 七〇七
 わが従兄 三三九

わが思ふ 三六六
 若くして 三七一
 わがこころ 一八七
 わが恋を 一九七
 わが去れる 三六五
 わがために 二四〇
 わが妻に 三三三
 わが妻の 一九五
 わが友は 五三三
 わが泣くを 一七
 わが為さむ 二六六
 わが庭の 二四三
 わが艶の 二六
 わが室に 四三三
 わが村に 二四三
 わが宿の 三三〇
 わが病の 六九一
 わかれ来て 四九四
 燈火小暗き 四四四
 年を重ねて 三六六
 ふと瞬けば 三〇三
 わかれをれば 三九〇
 わが酔(よ)ひに 三三〇
 忘れぬ 三三〇

忘れ来し 三六七
 忘れをれば 四六六
 笑ふにも 三九
 われ隠れて 二九
 われと共に 六四
 小鳥に石を 三三
 我と共に 三三
 栗毛の仔馬 三三
 我に似し 三〇
 我ゆきて 三〇
 ゐ
 田舎めく 一八四
 系
 酔(よ)ひてわが 三九
 遠方に 二二
 を
 をさなき時 三二
 孩児(をさなご)の 三三
 治まれる 三六
 男とうまれ 二四
 女あり 二四